

帆差追居、人撰等何分間ニ合兼先其儘出帆爲致候處、追々御船々歸帆相成候ニ付而者御船々之大小并軍艦運送船等之差別に隨ひ、人數取調候へば、當時之御船數丈ケニ配當仕候ニも、多分之人數ニ無之候而者差支、素より不可欠義ニ御座候間、先般醫學所頭取江相懸合、人撰中ニ付、取調出來次第、追々申上候積ニ御座候處、名前之者は、以前同所之人撰ニ而御船々乗組、航海御用度々相勤、醫業巧者、療養行届、御船中折合方宜敷、至極御用立候者共ニ而差向右三人之もの共、人撰出來候旨、醫學所頭取より申越候ニ付、兼而被仰渡之通、御扶持方拾五人扶持宛被下置、軍艦附御雇醫師被仰付候様仕度、尤醫學所頭取より、主人々々へ懸合候處、差支も無之旨申聞、且富士山御船等御修復皆出來相成、急速攝海江御廻しにも相成候間、早々願之通被仰付候様仕度、其餘御船々江配當仕候分者、人撰相濟次第尙可申上候得共、差向前書三人之者共、急速願之通被仰付候様仕度、此段奉願候、以上、

卯○慶應  
三年四月

町醫師

〔聞傳叢書〕醫師の養子、其業ニ寄、町醫師之忤に而も被仰付候事、

一醫師之類は、家業有之ものに付、家業宜、早速之御用に立候ものを願候は、御目見以下、并町醫師之忤に而も可被仰付候、

右之通、家業之譯を以て、養子被仰付候事に候得共、家業宜と計に而は難相成家業專に仕、早速之御用に立候者を、隨分吟味致し可相願候、猶又相糺し候上、被仰付に而可有之候、  
右之趣、組支配有之面々江寄々可被相達候、

五月○安永  
四年

〔徳川禁令考十七官醫長〕文久二壬戌年閏八月十六日

醫師推舉ノ儀ニ付達